

博士(2023年度)

オイコスが織りなす公平性のエスノグラフィー ——カリフォルニア州サンタクルーズの土地の論理と オーガニックな暮らしから——

浅岡 みどり

1. 論文の概要

本論文は、「自然」を人間社会のコミュニティに含める古代ギリシャの家を意味する「オイコス」(*oikos*)の視点から、現代を生きる人びとが「自然との共生」と、「社会正義」(Social Justice)を両立し、社会的公平性をめざせるかを問う。具体的には、オーガニック生産と消費が盛んな米国カリフォルニア州サンタクルーズ地域のエスノグラフィーをとおして、誰にでも必要な食、農と自然とのかかわりを見ることで、公平(Fair)な社会の実現が可能かを検討する。

調査地のカリフォルニアは歴史的に移民労働で成り立ってきた農業地帯で、アメリカの近代化とともに食の大量生産、大量消費を支えてきた。一方、サンタクルーズでは1960年代後半に若者の間で巻き起こったカウンターカルチャーの中で環境運動につづくオーガニック運動が社会正義への意識を高め、オルタナティブな農業と小規模な有機食品店などの市場を生み出してきた。しかし、自然との共生をめざしたオーガニック生産と消費は、資本主義の進展とともに市場経済中心のオーガニック産業を形成し、環境に負荷をかけながら過酷な労働を農業労働者に強いている。現在もそれに対抗したサンタクルーズ地域のオーガニック運動は、持続可能なフードシステムをめざすアグロエコロジー運動と相まって様々なオルタナティブな試みを続けている。

本論文では、サンタクルーズのオーガニック運動がどのように資本主義経済と関わり、社会正義に向き合ってきたのかを、「土地の論理」と「オーガニック生産と消費」に着目することで解き明かし、社会的公平性をどのように実現しているかを明らかにする。事例では、約1世紀前にカリフォルニアに渡った日本人の農業移民労働者(第3章)、その後を引き継いだメキシコ人の農業移民労働者(第4章)、ホームレスの人びと(第6章)などのマイノリティの人びとと、中間層の人びと(第2章・第5章)の暮らしをみることで、多様な人々が交わる場所における公平性を検討した。結論では、これらの人びとの土地の論理と、オーガニック生産・消費をとりまく暮らしが、自然を含めた有機的営み=オイコスの中に社会を置きなおしていることが明らかになった。自然と人間を二分しないオイコスの視座から、これらの人びとの暮らしは、①多様なマーケットによりエコノミー(市場経済)をエコロジー化し、②エコロジーの論理が働くオーガニックガーデンという場を誰にでも開くことで、社会的公平性をめざしていた。

以下に、土地に関する用語、社会正義・社会的公平性の定義を整理しておく(表-1, 2)。

表-1 土地に関する用語の整理 (筆者作成)

土地の論理	その土地に働く論理。土地倫理に対して論理は中立的で、土地における収奪、搾取の歴史、法制度を含める。またレオポルドによる土地倫理が反映する場合もある
土地における正義 = 社会的公平性	場所における公平性をみる本論文では、暫定的に人びとの「土地における正義」を社会的公平性の定義とする

表-2 正義と公平性の定義 (筆者作成)

社会正義 (Social Justice) 社会的公正・正義 (Justice)	不平等の再検討による暮らしの中のケイパビリティ (ウェルビーイング) と自由の追求 (Sen 2009=2011)
社会的公平性 ・ 公平性 (Fairness)	土地における正義 (本論の暫定的な定義) Sen(2009=2011)が示す多義的な正義を実在する場所に適用した公平性
食の正義 (Food Justice)	「フードシステムの中やそれを超えて存在する不平等に根ざした、人種差別、搾取、抑圧に対する闘争」(Hislop 2015: 24)によって正義を獲得すること
環境正義 (Environmental Justice)	産業による公害を社会的弱者が住む居住地域に押し付けてきたことに抗議する運動として始まる (Pressley 2015)。健康や環境に関する法、規則、政策の策定、実施、施行において人種や所得や収入に関係なく、誰もが公平に関与すること (EPA 2022)

2. 研究方法：モノ・自然物と人の関係からみるエスノグラフィー

社会的公平性の暫定的な定義を「土地における正義」とした本論文では、日常生活に着目することで多様な人々が交わる「現場から創る理論」(鳥越・金子編 2017)を、問いを書き換えながらつくっていく。そのとき、イチゴ・トマト・花などの自然物と人びとの関係に注目することで、社会との関係、自然との関係を読み解くエスノグラフィーの方法をとる。その理由は、①モノを媒介にすることで社会との関係が価値中立的に捉えられること (Miller 2012=2022)、また②農産物は、自然に働きかけて生産されたものであり、自然との関係を見ることができからである。また、古代ギリシャのオイコスの視座からみること、生態学の範囲まで含め、人間中心主義と生態系中心主義 (非人間中心主義) の両方の視点からフィールドを捉える。調査対象者は、サンタクルーズ地域の移民労働者、ホームレスの人びと、オーガニックを志向する中間層の人びとで、インタビューと参与観察、Zoomミーティングや電子メールを含めて2010年～2023年の間に調査を行った。

3. 論文の構成

第1章では、サステナブルな社会をめざしたとき、「自然との共生」と「社会正義」は両立するかという問いに身近な食と農の視点から迫り、自然を総体としてとらえるギリシャ語由来の *physis* 的自然 (関 1997) をコミュニティに含めるオイコスの視座から (Worster [1977]1985=1989, Thompson 2015=2021) 現代社会において公平性がめざせるかという仮説を示した。つぎにサンタクルーズ地域を調査地として、エスノグラフィーにより公平な社会の実現が可能か、「土地の論理」と「オーガニック生産と消費」に焦点を当て考察する意義を述べた。自然との共生については、自然と人間の二項対立の乗り越えのために、自然観とコミュニティ観の再考を行う。社会正義については、食・農の正義の先行研究を検討し、場所における公平性を暫定的に「土地における正義」と定義した。方法論として生活世界を、モノを通して見るエスノグラフィーについて検討し、調査概要と論文の構成を示した。

第2章では、カリフォルニアの場所性と土地利用、マイノリティの人々や移民農業労働者が受けてきた不正義の位相、オーガニック農業・運動から持続可能な農業、アグロエコロジー (Gliessman 2015) への変遷を通してどのような歴史的背景に社会正義の運動が起き「社会正義」が「土地の論理」として人びとの生活の中で慣習化して行ったのか、その過程をみていく。市場中心的な資本主義経済の中でこの地域の食と農にかかわる課題がいかなるものかを検討し現場から創る理論の方向性を示した。

第3章では、19世紀後半からカリフォルニアに渡った日本人移民女性Hisayo Iidaとその家族が、3世代続くイチゴ農家としてカリフォルニアに定住していく過程を描く。戦時中の強制収容を経てもイチゴ農家を継続し、自然を総体と捉え、土地に働きかけてイチゴを栽培することで、自己実現を可能にした。イチゴは日本人の文化的アイデンティティとなり女性や家族や同胞の生計を支え、日本人コミュニティでオイコスを形成していた。しかし、差別されてきたアメリカ社会において社会的公平性は得られなかった。

第4章では、アメリカで初めて商業的にイチゴ栽培をオーガニックに変更し、メキシコ移民の農業労働者の社会正義に向き合ったSwanton Berry Farmの試みを検討した。産業化したオーガニック農業に、環境問題と労働問題に向き合うことで対峙し、労働者の社会正義をオーガニックの価値として消費者に訴えた。自然を含めたコミュニティであるオイコスは、自然に倣った農業実践に農場経営者のCochranと移民労働者の信頼関係、そして商品に理解を示す消費者を巻き込んだオーガニック生産と消費によって築かれていた。消費者の意識に社会的公平性は委ねられていることが明らかになった。

第5章では、サンタクルーズの消費者であり中間層の人びとの日常の営みが、多様なマーケットとオーガニックな生産・消費を通じて、社会をエコロジー化することで贈与の感覚を取り戻し、様々な人びとの社会正義が共存し、公平性をめざしていることが明らかになった。その内実は、人びとは①多様なマーケットを通じて、それぞれの個性を生かした交換を行い、それを贈与の係りに転換する。②自給菜園などでオーガニック生産の一部を体験し、学び、楽しむことで生態系の循環を慣習化している。③人びとは多様な労働を選び、自律的で労働から疎外されないための工夫がなされている。④彼・彼女らのヴァナキュラーな暮らしは、社会と経済をエコロジー化する。⑤これらの営みから、資本主義を否定するのではなく、それと共存しつつ協道を通すことで社会的公平性をめざしている。それには、マーケットやガーデンでの対話が重要であった。自然を含めたコミュニティであるオイコスは、家庭や学校におけるオーガニック実践を通して*physis*的自然観をもつと同時に、多様なマーケットによりエコロジー化した社会を築いていた。しかし、生産者と消費者の間の公平性には貨幣交換による切り分けがあり、この乗り越えが課題として残った。

第6章のHomeless Garden Projectでは、社会から排除されたホームレスの人びとを公の場であるオーガニックガーデンに歓待し、消費者であるサンタクルーズの人びとにはガーデンと多様なマーケットを解放することで、人びとが出会い、学ぶ場をつくり、社会的な公平性をめざしていることが明らかになった。その挑戦は、ガーデン実践やCSA (Community Supported Agriculture)、ダウントアウンの店、ディナーパーティーなど、オーガニック消費の場で常に試みられている。ホームレスの人びとにとってオーガニックガーデンは、自然との関係を築き*physis*的な自然観をもつことでヴァイタリティを取り戻す場となる。社会の規範とは一線を引く土地の論理は、共有地と感じられる「土地における正義」を与え、誰でも公平に受

容するガーデンを用意して拠り所になっていた。またHGPはガーデンで民主的な土地の論理を貫くことで、消費者も区別なく、またオーガニック栽培であることで動植物が縦横無尽に行き交う公平な場をつくる。自然を含めたコミュニティであるオイコス、開かれた土地としてのオーガニックガーデンと、ボランティアによる無償の労働力や富裕層のモラルエコノミーとしての寄付によって、有機的社會を再建している。多様な市場を用意しオーガニック消費を誰にでも開くことでオイコスとして都市の片隅に、偶発的に集まる人たちによって異者の共同体をつくる。HGPは、市場にまかされない土地と労働を、自然の営みの中で贈与の関係に持ち込むことで社会的公平性をめざしていた。

第7章では、*physis*的自然観による生態系中心主義の視点から事例を再構成して公平な場をつくるためにはエコロジー化する社会へのパラダイムシフトが重要であることを示した。社会と自然を二分しない生態系中心主義は、自然の文化的理解によりガーデンの動植物、そこに交わる人々の環世界に気づきを与え、HGPのガーデンのようにアジールの様相を呈して誰をも受け入れる。人びとは日常のガーデン実践により自然の循環を慣習化することで、市場における交換は贈与の関係に戻すスイッチングを柔軟に行う。また、食の正義は環境正義と接合し、オーガニックガーデンと多様なマーケットにより学びの場をつくることで、社会を織りなおし人びとの社会的公平性が保たれていることを論じた。

第8章と結論では、サンタクルーズの中間層とマイノリティの人びとの土地の論理とオーガニック生産と消費が、自然を含めた人間の営みであるオイコスに近づいていることを論じた。現代的なオイコスは、ギリシャ時代の奴隷制やナチス・ドイツの閉鎖的な有機農業とは異なり、より社会正義・環境正義に配慮し外部に開かれたオーガニックガーデンと多様なマーケットの営みによりエコロジーとエコノミーが現代社会で統合された公平な場を創造していることが明らかになった。まとめとして、社会的公平性を「すべての人や生きものにオイコスの原理が働く公の場を開くこと」と再定義し、論文を締めくくった。

参考文献

- EPA, 2022, “Environmental Justice”, (Retrieved November 8, 2022, <https://www.epa.gov/environmentaljustice>).
- Gliessman, S., 2015, *Agroecology: The Ecology of Sustainable Food Systems*, 3rd Edition, Florida: CRC Press.
- Hislop, R., 2015, “Reaping Equity: A Survey of Food Justice Organizations in the U.S.A.” Thesis, Department of Plant Sciences. Davis, CA: University of California Davis.
- Miller, D., 2012, *Consumption and its Consequences*, Cambridge UK and MA USA: Polity Press. (貞包英之訳, 2022, 『消費は何を変えるのか——環境主義と政治主義を越えて』法政大学出版局.)
- Pressley, S. D., 2015, “Environmental Justice”, Thompson, S. ed., *Encyclopedia of Diversity and Social Justice vol.1 A-H*, Maryland: Rowman & Littlefield, 299-300.
- 関礼子, 1997, 「自然保護運動における『自然』——織田が浜埋立反対運動を通して」『社会学評論』47(4): 461-475.
- Sen, A., 2009, *The Idea of Justice*, Penguin Books Ltd. (池本幸生訳, 2011, 『正義のアイデア』明石書店.)
- Thompson, P. B., 2015, *From Field to Fork: Food Ethics for Everyone*, Oxford University Press. (太田和彦訳, 2021, 『食農倫理学の長い旅——〈食べる〉のどこに倫理はあるのか』勁草書房.)
- 鳥越皓之・金子勇編, 2017, 『現場から創る社会学理論——思考と方法』ミネルヴァ書房.
- Worster, D., [1977] 1985, *Nature's Economy: A History of Ecological Ideas*, Cambridge University Press. (中山茂・成定薫・吉田忠訳, 1989, 『ネイチャーズ・エコノミー——エコロジー思想史』リプロポート.)